

教科書について

「楽しく学べて、コミュニケーション力が付く教科書」を求めて

考えてみませんか？

皆さんはこれまで、どんな教科書に出会い、
どんな「付き合い方」をしてきましたか。

長年、既存の教科書について疑問を持ちながら考え、
試行錯誤を重ねた現場の教師たちから「できる日本語」という
新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で
教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと
共有していきたいと思います。

第 3 回

タスク先行型授業に チャレンジ！

「はじめに文型ありき」からの脱却

「シラバスの融合を図る」ことの可能性について、前回お話ししました。確かに、「文型積み上げ式教科書」であっても、教師の工夫でコミュニケーション力を付ける授業をすることができます。私が勤務する日本語学校でも、数年前まで「文型積み上げ式教科書」を使っていました。みんなで話し合い、アイデアを出し合い、やってはきたのですが、以下のような問題がありました。

- 場面・状況設定の必要性はわかっているが、つい、文型に注目しがちである。
- 教師によってかなり違うやり方になったり、タスクが重なったりする。
- 学習者自身が、「文型積み上げ式教科書」に引っ張られてしまう。

こんな悩みを解消したいという思いが、オリジナル教科書の作成につながっていききました。「たかが教科書、されど教科書」と、真剣に教科書作成に取り組むに当たって心に決めたのは、「タスク先行型授業」の実現でした。

とはいうものの、「やっとなんかできるレベルなのにタスク先行ができるのか」、「それで文法をしっかりと身に付けることができるのか」と、さまざまな疑問が出てきました。意見の一致を見るまで

には、かなりの時間と労力が必要でしたが、ついに「初級だって大丈夫。タスク先行でいこう！文型が後ろに隠れた教科書を作ろう！」と、みんなの考えはまとまりました。

「毎日、日本語の海の中にいる学習者の生活は、チャレンジの連続。だから、日本語の授業も接触場面を大切に、タスク先行でやろう」というA先生。「文法的な知識も、場面・状況と一緒に学んでこそしっかり定着する」というB先生。こうした意見の積み重ねが、新しい教科書の土台となりました。

タスクとは「達成すべき課題」のことで、「許可を求める」「人を誘う」「人の誘いを受けたり、断ったりする」などが挙げられます。例えば、「許可を求める」と

『できる日本語 初級』10課「バスツアー」



タスク先行型授業は、学習者も楽しい！

いうタスクでは「～でもいいですか」などの文型が使われますが、この文型が最初に出てくるわけではありません。「タスク先行型授業」とは、まずはタスクをやってみることから始まります。

一方、「文型先行型授業」では、まず動詞のテ形を導入し、それを使った文型として「～でもいいですか」を学び、その後応用練習をするという形になります。「初めに文型ありき」であり、タスクは後ろに引っ込んでいます。

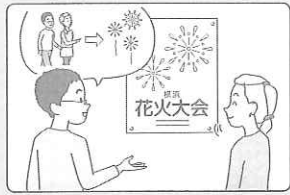
左下の写真を見てください。これは私たちが制作した教科書の中の見開きです。左側のイラストは「美術館に向かうバスの中」の場面。その下の左のコマのイラストは「隣の席に座る許可を求める」というタスクを表しています。学習者は、このイラストを見て、「こんな時、なんて言うんだろう？」と考え、まずは、このタスクにチャレンジするところから学びが始まります。例えば、クラスではこんなやり取りがあります。

学習者：すみません、いいですか。
 教師：いいですか？
 学習者：私は座ります。いいですか。
 教師：座ります？
 学習者：私は座りたいです。そこ、いいですか。

十分考えたところで、この教科書では、CDでモデル会話を聞きます。こうして学習者が、自分自身で、「そうか。こういう場面では『隣に座ってもいいですか』って言うんだ」と気付いていきます。タスクから入った文型は、使える日本語としてしっかり定着していきます。

これは、場面が移っても心配ありません。「ここで写真を撮ってもいいですか」「ここでお弁当を食べてもいいですか」と、許可を求めるための表現がどんどん口をついて出てきます。これがタスク先行型授業の大きな魅力なのです。

今日の教員室は、「“ませんか”さん(リンさん)」の話題で持ちきりです。タスク先行型授業が大好きなリンさん。今日の行動目標は「友達を誘う」でした。下のイラストを見ながら考えます。



「花火です。横浜で花火です。パクさん、行きましたか？ 行きますか？ 私は行きたいです。パクさんどうぞ」

その後、CDでモデル会話を聞き、「横浜で花火大会があります。一緒に見に行きませんか」という誘い方を知って大満足。それからクラスメートに「映画を見に行きませんか」「一緒に昼ごはんを食べに行きませんか」と使いまくり、「“ませんか”さん」という別名をもらったのです。



嶋田和子

イーストウエスト日本語学校副校長。外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。現在は、日本語教育業界を牽引するベテランの一人として学習者への日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。著書に『目指せ、日本語教師力アップ！——OPIでいきいき授業』(ひつじ書房)『キムチと味噌汁—韓日、異文化交流のススメ』(教育評論社)『ワイワイガヤガヤ 教師の目、留学生の声——異文化交流の現場から』(教育評論社)など多数。『できる日本語』(アルク)監修

- 連載 | 第1回 教科書を考えるって面白い！
- ライ | 第2回 どんな教科書と付き合ってますか？
- ン | 第4回 「わかる」から「できる」へ
- ナ | 第5回 漢字学習も「できること」重視！
- ッ | 第6回 「プロフィেশンシー」で、教師力アップ！ 1
- ブ | 第7回 「プロフィেশンシー」で、教師力アップ！ 2
- 第8回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 1
- 第9回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 2
- 第10回 自律的な学びを支えるモノ
- 第11回 「学習者が話したくなる」教科書とは？
- 第12回 対話で新たな日本語教師人生を！